

---

# ななしのワーズワード

奈久遠

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ななしのワーズワード

### 【Nコード】

N3817Y

### 【作者名】

奈久遠

### 【あらすじ】

世界最悪のサイバーテロリスト『ワーズワード』。彼は己の生命をかけたある計画を実行するが、それは原因不明の失敗に終わってしまう。結果、地球とは全く異なる世界に飛ばされてしまい……そして、ワーズワードの冒険が始まる。

## W a r p   W o r l d   0 1

ある『計画』を立ててみた。  
今日までの仕込みは上々である。

オープンテラスのカフェスペースでランチの到着を待つ間、俺はエアロビューを立ち上げ、暇つぶしをすることにした。

そういえば、『ワーズワード』の名で呼ばれるようになったのはいつからだっただか。

自分の脳内にある記憶野を検索しても良かったが、ネット上の検索サイトの方が、よほど手間がかからない。

ワーズワード による検索結果 約 1,768,400 件  
( 0.832 秒 )

検索結果の上位には、ニュース記事及び、それをネタにした掲示板へのリンクが並ぶ。

そこに躍る文字は、どれも物騒なものばかりだ。

21世紀最悪のサイバーテロ。破られた世界最高のセキュリティ、崩れたCOIN神話。犯罪史上最大の被害額。麻薬カルテルを壊滅、正義の使者ワーズワード。情報提供者に賞金支払5億COINを検討

エアロビューを流れる同じような記事、そのどれもが自分の行いの履歴だが、その中でもっとも目につくのはやはり、『COINサイバーハッキング事件』を取り扱ったものだろう。

COIN Cash Obtainable In Netw  
ork savings は世界統一通貨サービスの略称及び、  
そのチャージデバイスの愛称である。

これまで無数に発行されていた、いわゆる電子マネーが全世界規模で統合されたのは何年前の話だったか。

統一通貨名については、元と円が早々に負け、ユーロとドルとの一騎打ちとなったが、アジア諸国及びアフリカ勢の強烈な横やりにより、最終的には新たな統一通貨名『COIN』が正式採用されることとなったのだ。

そしてチャージデバイスとしての『COIN』は、亜金属製の円貨型デバイスで統一されている。この場合の円貨とはジャパニーズ『Yen currency』ではなく、丸いタイプの貨幣、という意味だ。

直径3cm大、やや大きめのCOINは、掌に握りしめて認証デバイスにかざすことで認証される。

COINには世界最高のセキュリティとして、『ミーム認証』が用いられた。

『ミーム』とは、人類のみが持つ個人識別が可能な情報遺伝子である、らしい。らしいというのは、それは完全に『COIN』に特化されたブラックボックステクノロジーであり、一般にはミームなるものの技術情報は一切公開されていないからだ。

21世紀の巨人。ノーベル・サイバーテクノロジー賞3年連続受賞のサー・エクシルト・ロンドベル教授の完成させた、このミームなるヒト識別技術はまさに完璧であり、世界最高と言つに異論はなかった。

だが、それは破られた。

正確には俺が破ったわけだが。

ハッキングに成功したとはいえ、そこはさすがの世界一の技術の詰まったサーバーである。

俺がそこにアクセスできた時間は、3分32.550秒のみ。

そんな短時間で行えたのは、事前にリストアップしておいた、チャイニーズマフィア・ロンビアカルテル・ジャパニーズヤクザと言った、暴力と麻薬で生計を立てている人種に関連するCOIN口座のセベラルパーセント、126万8052口座の残高を0に書き換えることくらいだった。

もともと俺の興味はミームなる技術の解析にのみあり、その後の口座消去はただのお遊びだったのだが。

だったのだが、世の中の的にはそのお遊びは思ったより大事だったように。

電子空間に溶けて消えた闇資金は日本円にして27兆2000億あまり。単一個人が起こした事件の被害額としては、世界一となった。

もちろん口座情報だけでなく、入出金明細、ミーム情報、バックアップもキツチリと消してあげたので、削除された口座を復旧させるには、厳正な本人情報確認が必要とされた。削除された内の26.85%は口座名義人が名乗り出ることなく、また本人確認に訪れたアホの子がその場で逮捕されたりと、一連の報道はなかなかの盛り上がりを見せた。

手を抜かないからこそ遊びは面白いのだ。

ネット上の無責任な議論は、その被害者が犯罪集団であることに對する喝采と、世界最高のセキュリティを突破したその技術力の高さを賞賛する方向に傾き、名もなきサイバーテロリストは一時英雄

と呼ばれた。

だが続いて、被害者の数十万人が世界中で同時多発的に発狂した。そんな、地球を沸騰する地獄の釜の底に突き落とす事態となつては、その名声も地に落ち、俺は世界最悪の犯罪者として、めでたく憎悪の対象へと昇華した。

『ワーズワード』の名はその頃から呼ばれ始めたものだ。調べてみると当時無名の俺に懸賞金をかけるにあたり、米国『STARS』コードネームが付けた識別名であるとのこと。

ほう、それは今初めて知った。

『ワーズワード』という響きが気に入った俺は、その後の印核軍事施設乗っ取ってみるテストや、ハッキングした人工衛星影像による金成恩<sup>キム・ソンウン</sup>8,760時間追跡動画をItube(アイチューブ:フリーの動画投稿サイト)で公開した際には、その名を使わせてもらった。

米大統領選の電子投票ジャックは、民主党候補のアホが「いまだ核物質を放出し続ける日本に、その収束まで継続的な懲罰金を課すべきである」などと、アホなことを言い出すから、仕方なくやっただけである。大変遺憾である。

とはいえ、選挙地図を真っ赤にしたのはやりすぎだったかもしれないな、反省。

ハッキングがばれた後の再選挙でもアホの方は普通に落ちたので、別にやらなくてもよかったかもしれない。

その行動のどれもが世界に衝撃を与え、やがてワーズワードの名

を知らぬ者はなくなり、俺はついに世界の敵たる23人のテロリスト  
ト 『エネミーズ23』 の中でも最高賞金首の指名手配犯と  
なった。

あらゆる人類の生生活動から、既にして切り離せなすことのでき  
ない電子ネットワークの領域を脅かすこの俺は、まごうことなき世  
界の敵だ。

それを俺は否定せず、また自らの行動に、一切の後悔も反省もな  
い。

『できるからやった』

それだけだった。

## W a r p W o r l d 0 1 (後書き)

折角ユーザー登録したので、お話を投稿してみるテスト

## Warp World 02

「お待たせいたしました」

そこで、ようやく注文のランチパスタが到着した。

道路に面したこのオープンテラスには心地よい陽射しが降り注いでいる。

やはり食事は明るい場所で取るのがよい。

そして、これが最後の食事になる。

俺はパチリとエアロビューを閉じると、スプーンとフォークを手に持った。

俺の帰宅を識別したハウスキープシステムが、自動的に室内をライトアップし、気温の調整を始める。

PCルームにつく頃には、『アイシールド』もすぐに装着可能な状態にスタンバイされる。

パソコンの主流は、汎用機からデスクトップ、ノート、スマートフォン、エアロビューと、その時代を反映して変遷してきたが、やはり最新のヘッドマウントタイプ、『アイシールド』は最強だろう。

モバイル利用はエアロビューで我慢するしかないが、感応入力

快感と、球面立体ディスプレイの感動を一度覚えてしまった者が、GUI (Graphical User Interface) のみをサポートするオールドPCに戻るはずもない。

アイシールドを装着した俺は、思考により行動し、思考により喋り、思考により存在する、ネットの住人たる仮想体アバターとなる。

アバターは正式には VUI (Virtual User Interface) といひ、感応入力をサポートした第三世代インターフェイスである。

ネット上のオープンスペースに出れば、自分と同じような、それでいて千差万別のアバターにすれ違うことができる。

通貨がネットワーク上でやり取りされる世界経済がリアルであるならば、アイシールドにより、実現される仮想世界もまたリアルである。

アバターというインターフェイス上で、巡回サイトをチェックし、エアロビューを展開し、動画を見なければテレビを付ける。

新聞紙コンテンツでニュース配信を受け取り、動画再生時は映画館アプリを利用する。

それは、現実世界の自分自身となんら変わらない行動様式だ。

『パソコンとネットワーク』が創りだす仮想の空間は、人類にとつての、もう一つの世界として成立していた。

時計を見る。時計は14時12分、帰宅後20分が経っている。

「さて、そろそろ時間だな」

ネット内でサードディスプレイを立ち上げ、中国国家航天局の人工衛星「中天王88」にアクセス。

コンソール起動、キー入力、全てが3秒以内に完了する。物理的な行動を必要としない感応入力は思考の速度がそのまま、操作速度となる。

俺くらいアバターを使いこなせるようになれば、下手なマクローを起動させるより、その場でリアルタイムコーディングを行った方が早いくらいだ。

手早く中天王88のサテライト・ビューをハッキング、近地上観測モードに切り替える。

中天王シリーズのメインOS「大鵬」<sup>ダーベン</sup>は純中国産、オープンソースでもここまで酷くないだろうとの評価を受けるセキュリティホルの固まりだ。

その割に、並列処理の性能は比較的高く、一機あたり、200〜300のバックドアプログラムをパラレル実行できる。

サテライト・ビューの解像度は高くないが、シリーズ100機を超える人工衛星で、ナゼカ日本国土のほぼ全域を網羅<sup>カバー</sup>しているため、日本国内のパブリック、またはプライベートスペースをライブ中継するには、大変優良な機体なのである。

地上監視カメラをコントロールし、ターゲットポイントにズームをあわせる。

ズームするポイントは、俺のこの家だ。

大通りには覆面パトカーが10台と外交官ナンバーを付けた防弾ジープが5台、裏口方向に自衛隊の車両が3台。パーキングには「  
・テレの報道車、空中を舞うヘリの姿も見える。

警察は想定内として、そうか、マスコミも動くか。

地上をちよこちよここと私服警察官が歩き回る。家を取り囲む人数

はSTARSと自衛官を合わせて、40名程度。アメリカ国家安全保障局（NSA）直轄のサイバーテロ対策部隊『STARS』最高閣議は、武器を持たない民間人一人の拿捕には作戦チーム10名体制で十分だという結論を出したはずなのだが、なるほど日本政府が横やりを入れたわけか。世界の敵たる『エネミー23』、それも史上最悪、最高賞金首のサイバーテロリストが日本人では都合が悪かったのである。

警視庁を前面で動かし、テロリスト逮捕の瞬間を全世界に見せしめるTVショーにしたてあげ、日本の警察が捕まえたのだという、大義名分が欲しかったというわけだ。

俺としても日本の評価を下げることは本意ではない。心から賛成できる作戦変更だ。

STARSとしては、その横やりによって逆に俺を取り逃がすのではないかと心穏やかでなからうが、まずは安心して欲しい。

万が一にも俺を取り逃がすことはないし、パソコンには俺がワーズワードであるという最小限の証拠も残している。誤認逮捕の線はない。

そもそも、ワーズワードの拠点情報を流した匿名さんはこの俺なのだ。その信用度は100%だろう。

今日は世界の敵『ワーズワード』が逮捕される日だった。

## Warp World 03

キンコン

家のチャイムが鳴らされる。

これは、来客を知らせるものではない、作戦開始のカウントダウンの合図だ。

STARS及び警官たちの強制突入まで、あと30秒。

ではこちらもそろそろ『計画』を開始しよう。

そしてそのためにはまず『ミーム』について、少し解説を加えねばなるまい。

ワーズワード始まりの事件、COINサーバーのハッキング。

目的は『ミーム認証』という未知なる技術に対する純粋な興味だったのだが、それをハックし、本質を理解するにあたり、俺は大いなる驚愕に包まれた。

『ミーム』は、個人認証を目的とした単なるヒト識別技術ではなかった。

ミーム情報は、個体を識別する情報でありながら、常に変化する。変化しながら、それでいて常にユニークな個人を指し示す。

最初俺は、それを毎秒変化するパスワードのようなものと認識していた。

だが違うのだ。

例を出そう。

生まれたばかりの赤ん坊のミームを記録したとする。

赤ん坊が成長するにつれ、ミームも増大、複雑化する。だが、それで居て同じその赤ん坊個人を示すことができるのだ。

赤ん坊が青年になる。するとミームは変化する。

青年が食事をする。するとミームは変化する。

青年が恋をする。するとミームは変化する。

不本意ながら、あえて、形而上の言葉を借りて説明するなら、遣伝子がヒトの『肉体』を形作る情報であるならば、ミームはヒトの『魂』そのものの情報なのである。

『魂』で納得できなければそれを『脳』と呼び替えてもよいが、ミームの本質はシナプス配線構造という物理的なものではない。形而下ではそれを説明できない、故に『魂』だ。

そして。

そして、世界銀行協力のもと、天才サー・エクシルト・ロンドベルはヒトから『魂』の電子的コピーを抽出することに成功した。それが『ミーム認証』技術というわけだ。

世界銀行の秘匿する『ミーム認証』が、魂を認証する技術だと理解したときの俺の興奮は、黒歴史として、永久に抹消せざるを得ない。

そして、『ミーム認証』がブラックボックステクノロジーとして秘匿されている理由は、技術的な話ではなく、神学的な理由に由来するのであろう。

とかく、神の領域を犯す科学技術は、非人道の烙印を押されるものだからな。

ミームについてはこの俺でさえ、その利用法・識別方法を解析できただけで、原理的には全く納得できていない。

だがそれが対象個人を誤差なく識別できることに間違いはなく、俺というイレギュラーさえいなければ『COIN』システムのセキュリティは、最低20年は破られなかったはずである。

……まあ、自画自賛は置いておくとして、その技術をハックし、ミームの本質を知ることとなった俺は、その更に上を行く計画を立てた。

魂とミーム情報は完全なる相似形を保つ。ならば、魂とミームの存在位置を置換することができれば、魂の在処が肉体である必要はなくなるのではないか？

それが俺の発想の原点である。

これは単なる妄想ではない、今の俺　パソコン内のアバターとして思考・行動している状態　が、形だけであれば、まさに『肉体なくして俺自身が存在する』状態そのものだからだ。

この計画により、俺の真なる魂はネット上のアバターに宿り、俺の身体はそのコピー『ミーム』のみを宿すことになるだろう。魂なき肉の塊というやつだ。

成功すれば今後必要なくなる肉体だが、それはそれ。長年使ってきた愛着ある俺の肉体だ。

身よりのない俺には、抜け殻となった肉体を維持してくれる親類縁者が居ない。

大手の病院施設に費用を支払えば、ある程度は可能かも知れないが、脳死状態の俺の扱いに対する信用度が低い。

その点、『STARS』は信用できる。

俺のパソコンには物的証拠として、法廷で立証できるだけのものは残していないため、必ず俺自身の自供が必要となる。

彼らは、俺の生命の維持に全力を傾けてくれるだろう。

追求のために。

裁判のために。

正義のために。

それも全て無料でだ。

ドンッドンッ ガシャンー！

ジャスト、30秒。

STARS及び、警官たちの強制突入が開始された。

同時に自衛隊の手によってこの家に対する外部電源供給停止、電波ジャミング（ネットワーク封鎖）が行われる。さすがにそれは対策済みだが。

サイバーテロという個人レベルの犯罪に対しては、結局人間という物理リソースを利用した直接的な武力行使こそが唯一にして、最大の効果を持つのは間違いない。

金属弾頭の制圧兵器により、リビングの強化ガラスが割られ、ハウスキープシステムが警報を発する。

玄関も同じような状況だろう。

全ては、計画通り。

何も知らせてはいないが、『ベータ・ネット』の連中の反応も楽しみだ。

それではそろそろお別れしよう。

さらば、俺の肉体。

俺はそれ以上の感慨もなく、淡々と実行キーを押した。

そして 世界が変わった。

## Warp World 03 (後書き)

『ミーム』についてはあくまでこの物語の中での取り扱いを説明しています。

一般的にWikiられている概念とは異なるものですので「りょーしょー」お願いします。

つまり「この作品に登場する全ての個人・団体・概念等は架空のものであり、ザッツオールフィクションです」OK？

## Warp World 04

まるでブラックホールに吸い込まれたかのような、強烈な引力。それは一瞬の出来事。めまいに似たよるめきと共に、一步を歩き出したことで、そこに大地があることが認識できた。

いや、”歩く”という認識がまずおかしい。アバターにとって、歩くという行動は、歩くという思考であるからだ。

つまり、思考なき行動は、未だ俺には肉体があるということ在意味する。

まさか、失敗、したのか。

考えられない。

だが、まずは現状認識が先だ。

疑問を解消するには、情報が足りない。

それは決して、強靱な精神力の賜物というわけではない、情報不足こそが最大のリスクであると判断した結果の、理性的な行動である。

今度こそ、しっかりと大地を踏みしめ、あたりを見渡す。

……………は？

そして得られた膨大な情報の前に、今度こそ、俺の思考は完全に停止した。

俺が今いるのは、林の中の小径であった。道は平坦ではなく、登

る道と下る道、山間を通る林道か、あるいはそのまま山頂へ続く登山道であるのかもしれない。

高く林立する樹木の群れは、まるで先が見えないが、整地された小径は人の存在を感じさせ、孤立の不安を湧かせることはなかった。

日は高いようだが、高い樹木に覆われた小径に落ちる木漏れ日は少なく、林の中にしては鳥の声も少ない。

それに恐ろしく林気が濃い。濃密すぎる負のイオンは逆に五感を狂わせ、あるいは幻惑するかのようであった。

というか。

……実際にイオンが目に見える。

木々の間を漂う光の粒。大小様々で、小さなものはおそらくゴマ粒程度、大きなものではピンポン球サイズのものもあるため、全てを粒と呼ぶには多少難があるかもしれないが、まあ便宜上『粒』と呼ぼう。

光の粒は、色とりどりである。基本的に白と緑が多いが、中には黄色や青、赤いものが混じっている。視界を遮らない程度に空中に漂うそれは、自分で言った手前の否定になるが、おそらくイオンなどではないだろう。どちらかというと、ネオンの方が近い。

ずっと、手を伸ばして見るが、思った通り触ることができない。触れた瞬間消えてしまったり、あるいはすり抜けたりする。

そして、それはただ漂っているわけではなく、ごく弱い磁力で引き寄せられる砂鉄のように、俺の身体にまとわりついてくるのだ。

触れない割に手で払うという行為は有効らしく、軽く手を振ると

散らすことができる。

これは一体なんなのだろう

そこで、俺はもう一つ、この光の粒が集まっている場所を見つけた。

小径に面する、一本の木の裏のあたりになにやらわだかまっているのだ。

「 なにかあるのか? 」

声に出した瞬間、

チャキ

金属が擦れ合う音が聞こえた。

右も左もわからない今の状況では、全てを警戒するべきだという判断の元、その危険性を認め、行動の優先度をその確認に割り振る。

音のした場所へ回り込んだ瞬間、その目前に突きつけられた鋭利な鈍色の反射を認め、俺は脚を止めた。

そこには『武器』を構えた、識別：第一接触者の姿があった。

「 杓矢・・杓矢酌軸爵写釈漆灼鳴柴酌 」

そして、理解のできない言葉。

「 ……そうきたか 」

俺は、『武器』の危険性よりも、現状認識につながる大きな情報の取得ができたことに、思わず綻んでしまった。

識別：第一接触者の発した言葉が日本語でないことは確定であり、また英語、中国語といったメジャーな共用語ではない。

もちろん地球上には俺の知らない言語もあるうが、俺はそれを、識別外言語であると認定した。

それを肯定する材料の第一が相手の姿である。

そこに居た識別：第一接触者は女性だった、いや……十代の少女と言った方が適切であろう。日焼け一つない、雪の結晶で作られたような白い肌。基本白人の特徴を持ちつつ、髪は青。染めているのでなければ、地球上には存在しない髪の色。耳も不自然に長い。

背丈は俺より20cmほど低い。年齢に合致した身長というよりは、栄養の足りていない人間に見られる、成長不全だろうか。

それを証拠に、少女を構成する身体のパーツ一つ一つが、全て細いのだ。当然のように胸も薄い。

だがそれは、その少女を美しいと表現することをなんら拒否するエレメントではなかった。

事実、美しいのだ。

少なくとも俺は、これほど美しい造形を持つ生身の人間を見たことがない。

その色素の薄い露草色の瞳には、警戒とおびえの色があった。

そして、第二にその衣服。

視線を落とせば、少女が身に纏うのは、金属部分に錆が浮き全体として赤黒く変色した革鎧と、その下には質の悪い麻製と思われる

上下。足元はメーカー印もない、粗末な革製の靴。

手には、これまた博物館でしかお目にかかれなような、アイアンソード。

その重さに耐えられていないため、何ともアンバランスな姿勢になっている。

青い髪と透き通る肌を持つ、まるでおとぎ話から抜け出てきたような少女に、そぐわぬ使い込まれた革鎧。

以上二点を現実をして受け取るのであれば、そんな人間の存在するここは地球ではなく、それゆえ、その言語は識別できるはずもない。それが俺の判断だった。

そもそもアイアンソードの時点でありえないだろう。もしここが地球上であれば、それがどのような最貧国であろうと、武器は銃である。

再度己の心の中に、言葉を落とす。

「ここは俺の知る地球ではありえない、と。」

## W a r p W o r l d 0 4 (後書き)

ここまでのまとめ：スイッチオン 異世界 で4話消費。

ここは地球ではない。

その己の判断を支持、即座に「常識」という物事の枠組みを捨て去り、まずはそこまでの認識を持つ。

何も判然らないという状況に代わりはないが、「何も判然らないことを前提に情報を取得すべき」だという行動方針が策定される。であれば、次なる行動は相手に対する前提条件の付与である。

「落ち着け。そちらの言葉は通じていない」

俺は『日本語』で、言葉を紡いだ。

驚きと共に、少女の露草色の瞳に困惑の色が混じる。

そこで少女も気付いたのだろう、言葉が通じていないことに。

その共通認識こそが俺の付与した前提条件。

少女を、言葉が通じないという自分と同じ盤上に立たせたのだ。今後のやり取りは、その共通認識を前提に進めることができる。

「写釈漆灼嶋柴酌？」

おそろおそろ、次なる言葉を続ける少女。

俺はそこから、次なるタスク。その言語の解析作業を開始する。

始め、こちらを警戒していた少女。

得体の知れぬ相手とコンタクトを取る場合の言語選択としては「何者であるかの誰何」「敵味方の判別」「警告」あたりが推測される。

さらに、こちらから「言葉が通じない」ことを直接的に伝えた際の反応が、更なる警戒ではなく、困った様子であったことを考えれば、敵対意志に重きを持つていない、つまり「何者であるかの誰何」に属する言葉であったと仮定される。

そこを起点に、前提条件の付与前後での共通部分「灼嶋柴酌」(の発音)がその「何者であるかの誰何」に属する意味であると、まずは推測する。

その「まず」という仮定を起点に、次は、検証を行う。

この場合の検証とは、それが「あなたは誰ですか?」と言う意図の言葉であると仮定し、同じ言葉を出力する行為を指す。

「灼嶋柴酌?」

補助として、異言語間でもっとも有効な言語「ボディランゲージ」  
柔らかな表情と手の平を相手に向ける動作 を交えて検証を行う。  
う。

もし先ほどの仮定が間違っているのであれば、間違っていることに属した検証結果が返ってくることだろう。

その時は先ほどの仮定が否定されたと判断し、次の仮定を元に検証を行えばよいのである。

検証結果は明快であった。

「杓、灼嶋柴葱邊紗屢鹿」

少女は少し安心した表情で、そして幾分緊張気味に、革鎧の上手に沿わせ、そう答えた。

とりあえずは言葉が通じたことに安心したのだと理解して、間違いない所作であった。

先ほどの仮定を正として、そこからさらに解析を進める。一步前  
進だ。

先ほどの言葉が「あなたは誰ですか？」の意味であるのだから、  
次の言葉には自己の名前を明かす意味が含まれているのだと推定す  
る。

そこに含まれるべき言語体系としての蓋然性、主語の存在を解析  
する。

おおよその言語では主語は、文頭にくる可能性が高い。そこに着  
目すれば先の少女の言葉の文頭にあつた「灼」と「杓」、発音の類  
似性からみても、これが「灼」<sup>あなた</sup>二人称」と「杓」一人称（私）」で  
あると仮定することは難しくくない。

主語につながっており、かつ単文の中で多く出てくる「鳴」の発  
音部分は単独で意味を持たない接続語であると類推し、解釈上無視  
する。

同様に名前に関するやり取りから「柴」氏名」の意味、かつそれ  
以降を氏名の固有名詞であると仮定する。

固有名詞はその意味を追う必要はない。発音そのままのでよい。

であれば

紗屨葱邊鹿〃シャルローフェルニ。それが彼女の名か。

まず少女と指さし、

「灼嶋柴『シャルローフェルニ』」

「簾！」

コクコクとうなずく少女。長い耳がピコピコと動くのは感情の表れだろうか？

問題なく、通じているようだ。

そして、次は自らの胸に手を沿わせ、

「灼嶋柴」

……そこで、一つの思考が挟まれる。

俺の名前。当然日本人として名乗るべき、呼ばれるべき名がある。だが、俺は先ほどその肉体に別れを告げたばかりだ。

であれば、俺の名乗るべき名は、

「灼嶋柴 『ワーズワード』」

であるべきだろう。

「簾！ 燦璽燦遠！」

こちらを指さす仕草。ちゃんとコンタクトが取れたことに、喜びのままの笑顔になる少女。

アイアンソードの切っ先は既に取り下げられ、その重みで柔らかい腐葉土にめり込んでいる。

意志疎通の第一段階がクリアされた瞬間であった。

始めにあつた警戒は、こちらがあまりに無防備であること、さらに片言であれ言葉が通じることと払拭されたい。

もちろん装うまでもなく、敵対意志はないのだから、これを機にさらなる解析と検証を進めさせてもらう。

わからないものをどの程度わからないのか判定する。次に手持ちの情報を元に順次解析する。

データを取得し、仮定し、検証する。仮定が間違っていれば、立ち戻り、訂正を行う。

その繰り返しを一つのプラクティス単位とし、反復を繰り返す。つまり会話を続けることでその精度を高めていく。

それは驚くべき言語感覚と映るかも知れない。

だが、『世界最高のハッカー』と呼ばれた、俺にとってはなんら苦のない作業。

そう、これはハッキングである。

その対象がコンピュータプログラムから、不明な言語に変わっただけである。

もちろん、ここにエアロビューの一台でもあれば、その効率は更上がることだろうが、俺にとってはデータの展開先が、パソコンのメモリ上であるか己の脳内であるかの差だけだった。

どうと言うこともない。さあ現状分析を続けよう。

「えっ、本当に、全く言葉がわからなかったんですか？」

「正確には今でもわかってはいない。俺の言葉が通じているのか、シャル　君の反応を常に確認している」

「ちゃんとお話できていますよ。最初だけわかりませんでしたけど、その後は全然」

林中の小径を、下る方向に歩きながらの会話である。

シャル・ロー・フェルニ。見た目上の年齢は十代前半。

線の細い少女であるが、だからといって性格までが細いわけではなかった。

一度警戒がとけた後は、積極的に話しかけてくるため、日常会話レベルなら全く支障なく、会話できるまで言語解析がすすんでいた。

「それは君のその目のお陰だな」

「目？」

自分の目が見えるわけでもなからうが、むうと瞳を中央に寄せようとしている姿がコミカルである。

「俺の国にはこんな言葉がある。『目は口ほどにものを言う』と」  
ただ発声だけのやり取りであれば、これほど短期間には解析が進まなかったであろう。

表情豊かな彼女の仕草一つ一つが解析情報の手がかりとなり、検証効率を高めたのである。

「目で喋るんですか！　わ、私はそんなことできませんよっ」

驚きに、彼女の大きな露草色の瞳が、更に見開かれる。

「いや……それは物の例えであってだな。こちらの場合で言えば  
耳は口ほどにものを言う』か?」  
「こんどは耳?」

小首をかしげるかわりに、その長い耳がへによりと折れる。

この世界の人間の特徴なのだろうか?

彼女の感情に合わせるかのように、ピコピコと動くその耳は見て  
いて飽きない。

「ちよつといいか」

「はい?」

さわっ

気になったので、触ってみる。

瞬間、ビクンと、シャルの身体が硬直した。

「ッ!」

「ふむ?」

やわらかい。

さわさわっ

さわさわする回数に合わせて、シャルの新雪の肌が徐々に赤熱し、  
露草色の瞳がまんまるく見開かれていく。

「見、」

「び?」

「兇黷靈熙熙兇熙罕　！」

林間にこだまするほどの高い声が、響き渡った。

キーンと突き抜ける耳鳴りに耐えつつ、

「すまない、今のは聞き取れなかった。もう一度頼む」

俺は冷静にその言語の解析に入る。

ズザツツと跳ね飛ぶように身を離すシャル。耳が針金でも入ったかのようにピーンと、立っている。

それを両手で隠して、半涙目で、俺を睨み付けるシャル。睨み付けるその表情もまた、魅力的である。

「にゃ、にゃにをしゆるのですかあ!？」

「耳を触らせてもらったただけだか」

「み、み、耳れすよっ」

「耳だな」

「だ、だめでしょ!？」

「だめなのか？」

「あ、あたりまえですっ!」

なぜか口調が乱れているシャルに対しあくまで冷静な受け答えを行う。

その淡々とした姿にシャルは、大きいため息を落とすと、

「そうでした、ワースワードさんはこのあたりの人ではないんですよね。……今回だけは許します」

日本からきたということはすでに伝えてあったが、シャルの中は「どこか遠い場所」というインプットがされたようだった。

日本が別の世界である、などということとは想像の埒外だろう。俺も細かい状況を伝える気はない。

情報取得の作業を優先するためだ。

「そうか、ありがとう」

「今回だけですよ!」

「わかった。次からは許可を取ることにする」

「きよ、許可なんてしませんっ!」

真っ赤になりながら、断言するシャル。

たわいのない、じゃれ合いのような会話。

こんな会話をしたのはいつぶりだろう。

……いや、おそらく俺自身で言えば、そんな経験はないはずだ。

ドラマかアニメか、作られたコンテンツの中のキャラクターが行っていたものを、己の体験として錯覚したのだろう。

それを寂しいことだと考える人間もいるだろうが、まあ今時の若者の経験値など、そんなものだ。

「……うっ、ワースワードさんはいじわるです」(小声)

その小さな呟きもしっかりと耳に届いているが、意図的に無視する。

折角コミュニケーションがとれるようになったのだから、質問したいことは沢山あるのだ。

「それより、さつきから空中に漂ってるこの光の粒がなんなのか、教えてくれないか」

「光の粒……ですか？」

シャルにまとわりついているのは、主に白い光の粒である。

俺の方は、色とりどり、手で払わないと視界が遮られるほど集まってきたうっとおしいのだが、シャルの方はそれほど多数ではないため、気にならないのだろうか。

「なんですかそれ？」

シャルがきよとした表情で、問い返す。

丁度、その大きな瞳の前を、大きめの光の粒が通過するが、シャルは全く反応しない。

「……見えていないのか？」

「ええっと、光なら見えています」

「それは、地面にできた木漏れ日の円だろう」

「これだ、これ」

試しに、自分にまとわりついているもの内、一番目立つ赤色の粒を指さしてみるが、

「ん、すみません、わかりません」

耳をへによりとさせるだけだった。

それはそれで、十分な検証結果である。

シャルに見えないものが俺に見えている、という情報が得られたわけだ。

「あの」

「なんだ」

「こんな山の中に突然現れるなんて、ワーズワードさんは殃瀆穢な  
んですよね？」

「殃瀆穢？」

「はいっ、傷を治したり、遠い距離を転移したり、雨雲を呼び寄せ  
たり！」

……ふむ、科学的な話ではなさそうだな。「殃瀆穢」魔法使い「  
くらいに置換しておくか。」

しかし、中世さながらの鉄製武具に、魔法などというファンタジ  
ーまで存在するとは……いや、逆にそれくらい物理法則を無視する  
『超理』があつたほうがまだ今の状況は説明できると言うものか。

「いや、違うな。俺はただのワーズワードだ」

「普通の人にはみえませんか？」

「確かに耳は長くないがな」

「み、耳の話題からはもう離れてください！」

いい反応である。

このネタはしばらく引つ張れそうだ。

「その無邪気な微笑みが逆にこわいです……あの、じゃあ、これか  
らどこへ行かれるんですか？」

「正直決めかねている。この場所にいる理由も実はわかっていない  
んでね」

「じゃあ、お国に帰られるんですか？」

……それには即答できない。

帰る 帰ることができるのか。

帰れたとして、俺の肉体は今頃、拘置所の中だろう。

いや、その思考にも破綻がある。

今ここにある肉体はネットで使っていたアバターの姿ではない、生まれ育った俺の姿だ。

肉体ごと転移したというのなら、あれだけの完全包围を敷いておきながら、俺を取り逃がした日本警察とSTARSは、今頃ネット上で大いに笑う物にされていることだろう。

その祭に参加するためだけに、帰りたい気持ちはある。

だが、現時点でその方法はわからず、そもそも肉体ごと転移したという発想も違和感がある。

肉体ごとの転移であれば、それは神隠しとも言つべき、可能性コソマ以下フォーナインの世界だ。

自室で、あのタイミングでそれはありえないと考えて良いだろう。俺の計画のどこかにバグがあり、その結果が今の状況につながったと考えるべきである。

しかし、現時点では完全に情報不足だ。

「……帰りはしない。仮に、それを目的にしても情報がたりない」

「情報、ですか」

「ああ、もっと情報がほしい。会話はシャルのおかげで、多少できるようになったが、現状認識が正確ではなければ、必要な情報の取

捨選択ができない。この地の人間がどれほどの文明レベルを築き、どのような生活をしているのか。シャルの言う魔法使いとやらにも興味がある。もっと情報の集まる場所へ行きたい」

「な、なるほどっ。難しい話なのですなっ」

……理解を放棄してまで、無理に相づちを打たなくてもよいのだがな。

「……あー、村とか町、そういった人の集まる場所に行きたいということだ」

「あ、それなら行き先は一緒です！」

弾んだ声。初めてあった相手になぜこれほど気が許せるのか俺には謎だ。

「ここ、ニアヴ治林を超えれば、『愈洒釈臺』はすぐですし」

愈洒釈臺＝ユーリカ・ソイル。

新しい単語である。文脈を考えれば、土地の名前か国の名前だろう。

「『ユーリカ・ソイル』はこの国では二番目に大きい街ですし、その情報っていうのも売ってると思いますよっ」

「いや、買うものではない……いや、買う場合もあるか。そこまで同行してもらえると言うことか？」

「はいっ、もちろんです！」

耳がピコピコと激しく上下する。

自分が、人の役に立てることが嬉しくてたまらないといった様子だ。

喜びを隠しもしないその姿は、俺に若干のとまどいを与える。

高度にネットの発達した現代において、人は知識に、感情に、無知ではいられない。

ネットを利用するものが無知であるのは、リスクである。単なる無知は蔑まれ、更なる無知は攻撃され、金を持つ無知は喰い物にされる。

結論として、アホはネットを使うなということだが、生活から切り離せない以上、人はどうやっても清濁併せ持つネットに適応しなくてはいけない。

自らの全てをさらけ出すのはアホのことだというのは、これはもう常識である。

まず疑う、必要以上の情報を出さない。明るく振る舞うのも、力をやるのも、ネット上に自分で作り上げた人格であり、それは純粹さとはかけ離れた、計算されたものだ。

だが、シャルは違う。

俺は何一つ彼女に信用されるような言動を取っていない。

『相手を信用することが人間関係の始まりです』

そんなコミュニケーションは地球では絶滅している。

全く……ここでは地球の常識は通用しないではないか。

この地は確かに、異世界であった。

「ユーリカ・ソイルまではまだかかりませう」

ネット上に還元されるべき俺の魂が、この異世界に飛ばされたことは、自分の能力にマイナス評価を与えるべき、計画の失敗ではあるが、

「もっと色々お話できますねっ」

シャルの笑顔を見ると、その全てが失敗ではなかったと、そう思えるのも事実だった。

俺の今居る場所は、ニアヴ治林という場所であり、直近の街ユーリカ・ソイルには日が沈むまでにつけるらしい。

ちなみに固有名詞については、自分で理解しやすいようカタカナ表記できるレベルに脳内意識しているので、厳密な発音としては正確ではない。

シャルに話す際には、こちらの言葉にエンコードしなおして発声しているため、そこでの意思疎通に問題ないというわけだ。

相変わらず、まとわりついてくる光の粒がうっとおしい。

シャルは、自分に見えないものが俺には見えていることに、不思議さを感じてはいないようだ。

シャルにとつても、俺は異なる文化圏から来たよそ者である。異文化交流で相手を否定せずありのまま受け入れられるのは、知性が高い証だ。

剣やら鎧やら、ぱつと見の文明レベルは低そうだが、この世界の教育レベルは案外高いのかもしれない。

それとも、シャル個人の資質に由来するものだろうか。

「少し時間を取ってしまいました。急ぎましようか」  
「諒解した」

申し訳程度だが、縁石が敷かれた小径。

歩くことに難はなく、かつなだらかに下る道なので、体力に自信

のない俺でも大丈夫だろう。

歩き始めた瞬間、道の前方で、ただ漂っているだけだった光の粒の動きが乱れた。

思わず立ち止まる。

「どうかしましたか？」

「……いや」

10つの大きめの光の粒が一定間隔を置いて、空中の固定される。そして、光の粒が弾けた。

「くっ」

「きゅ」

眩しさに、思わず目を覆う。この光の爆発はシャルにも見えなかった。うだ。

直後、声が響いた。

「そこで留まるがよい」

目の前に、唐突に、巨大な一匹の虎が出現していた。

物理法則をあざ笑うかのようなその出現は、全く持ってファンタジーである。

「あ、あ、あ」

シャルの顔からは既に血の気が引いている。

ぺたりと腰を抜かし、耳は降伏の証のように垂れ下がっている。

少なくともそのお腰に付けたアイアンソードの出番はなさそうである。無駄な抵抗的な意味で。

……しかたない。

俺は一步踏み出すと、シャルを後ろに庇うようにその生物と対峙した。

「ほう、お主は恐れんのか？」

虎が、くつくつと嗤う。

四肢をついた状態で、その口の位置は俺の頭を越えている。立ち上がれば、4メートルは軽く超えそうだ。

「……逃げない理由は三点ある。一点は、お前が言葉を喋れるという点だ」

「ほう」

「わざわざ姿を現し、声をかけてきたということは、俺達に即座に危害を加えるつもりが無いということだ」

俺の言葉に、真実は半分ほどしか含まれていない。

実際はこのような化け物と言葉が通じるからといって、それがそのまま安全であるとは考えていないからだ。

「くつくつく、私の姿を見て、恐れぬ理由がそれか。ではあとの理由はなんだ？」

なおも嗤う虎。

安全と判断した、二点目の理由、それはどうもこの虎は張りぼてであるようだからだ。

……声は確かに目の前の虎が発している、ように見える。  
だが、俺の目には、虎がリアルな立体影像にしか見えないのだ。  
先ほど弾けた10つの光点は、虎の額、口、首、背、手足、そして尾の位置でいわば星座のように、今も輝いており、それが虎の皮を被っているだけに見える。

実体のないものを恐れる理由がない。  
そして、さらにもう一つ。

俺は、虎の更に後方、背の高い木へと視線を延ばす。

「ッ、貴様、どこを見ている!」  
「ひっ!」

シャルの小さな悲鳴。

俺の視線に気付いた虎が威嚇する。が、その行為自体が、墓穴である。

俺の考えが正しいことを裏付けるだけの行為だ。

そう、俺の見る先、木の高い枝に俺やシャルのような光の粒が集まっているのである。

そして、そこから、糸を引くように光の筋が虎へとつながっている。

「二点目は飛ばして、三点目だ。……自分の姿を現さず、裏に隠れているような相手を恐れる理由がない」

「なんだと」

俺の視線は既に虎をみていない。

「冷静に行こう。そちらの意図は知らないが、少なくともこちらに敵対の意志はない。話がしたいなら姿を現せ。それでこそフェアというものだろう?」

……これもまた半分は真実ではない。

有利に交渉を進めるには己の位置を明らかにすべきではないからだ。

だが結果、相手が姿を現そうと、隠れたままだろうと、どちらでも良い。

挑発を込めた俺の言葉に対する反応で、まずは相手のレベルを判断できる。

ボールを投げ、その反応を検証する。検証結果からより己に有利な結論へ到達すべく、相手を誘導する。

これもまた、ハッキングの手法である。

俺は危険を感じるより先に、新しい情報が増えることに喜びを感じていた。

ふいに、虎の口調が変わった。

「くっくくくく! お主、なかなか面白いわな!」

それは女の声であった。

ガサリと音を発して、木の上からそれが、飛び降りてきた。

その身には、やはり光の粒がまとわりついている。

想定通り、この光の粒は人間、あるいは生き物にまとわりついてくる習性があるのだろう。

虎を左に従えるように降り立ったその姿は、

「……狐？」

「いと聡き汝に敬意を表し、我が身を顕そう。妾はこのあたり一帯を治める『ニアヴ』」

それは人の姿をした狐だった。

中世風のシャルと異なり、緩やかにそして大きく胸元の開いた布の衣装はまるで浴衣か巫女服か。

茶色く毛の生えた獣の耳、大きく太い尾。人語を話す狐の化生といえ、もうそれは決まっている。

「……九尾だと」

「九尾？ どこから見ても一本しか生えておらぬがのう。お主の目にはどのように見えておるのじゃ？」

おっと、俺としたことが、つい口に出てしまった。

「ま、まさか本当に、ニアヴ様っ!？」

「ふふん、無論じゃ」

「知っているのか、シャル」

「は、はい。街や村を治める群兜マウダ様がいるように、森や山にはその

地を治める瀆獣様がいらつしゃいます」

判然らない単語はマーケティングしておき、後で解析するリストに加えることにする。

「瀆獣様の治める土地では、人は獣に襲われることはなく、交通の安全が保証されるといいます。お姿を見たのは、私も初めてなんですけど……」

「深き山林は人の地ではない、故に侵すべからず。だが、人もまた神の嘉したもう子、故に見守りたもう。不侵の条約と引換に、交通を許可すると、ま、そういうことであるな」

得意げに、高らかにのたまわう狐の声。

なるほど、論理的な交換条件である。それでシャルのような少女でも一人で行動できるのか。

「汝らの名を告げよ」

「あ、すみませんっ、私はシャル・ロー・フェルニと申します！」

「……ワーズワードだ」

「ふむ、素直でよろしい。妾の目は、この山林の中であればどこまでも届く。お主らを見守るとともに、無法を働く者がおれば、即座に駆けつけると言うわけじゃ。故に」

狐の化生　ニアヴが一端、口を閉ざし、凝と俺の全身を目踏みする。

「……お主は何者じゃ？ 強力な何かが進ったと思うたら、妾の治地に覚えのない人族が一人増えておるではないか。その上【リープ・タイガー／飛虎】に対して動じず、おまけに妾の存在に気付くとは……くっく、お主、さぞ名のある魔法使いなのであるうな」

ニアヴは、まるで興味深いおもちゃを見つけたかのようににやにや笑う。

一方俺は、

「ふむ、数と大きさ、それに色にも共通点がないか。これでは判定基準にできないな。であれば、単純に光量をその観測単位とするかどちらにしても正確な計測ができない以上、俺自身を計測基準100カンデラとして、相対光量を数値化」

「……は？」

全く別のことを考えていた。

「1000からの相対比。シャル5カンデラ、ニアヴ30カンデラと言ったところか」

やはり、俺の周辺だけ異常に眩しすぎる。

「だからっ、お主何を眩いておる！」

「お前が操っている、この光の粒の話だ」

「光の粒？ なんじゃそれは」

「……見えないならいい。少し待て」

「お主っ！」

ふよりと目の前を横切るそれを、手で払う。  
ならばこれは一体なんなのか。

……一つの仮定は既に俺の中にある。

大気中に漂い、触れることのできない色とりどりの光の素粒子。のよつな  
それは目の前の虎の姿のように、コントロールできる代物であるらしい。

とすれば

「すまない、待たせた」

「お主、無礼なのか慇懃なのか、どちらなのじゃ？」

「その判断はそちらですればよい。先ほどの質問だが、俺は期待されている魔法使いという存在ではない。だが、その魔法とやらを使える可能性はある」

「わからぬ言い回しじゃな。結局の所どうなのじゃ」

「そうだな……その魔法というものをここで使ってみてくれないか？」

それで明瞭はつきりするはずだ。

「あの、ワーズワードさん。濬獣様はこの山林の守り神様のような存在です。なのでそういうお願いは……」

「だめなのか？」

「よいよい。妾は面白いものが大好きじゃ。見せろというのなら、見せてやるのではないか」

じゃれるように頬ずりをしてくる【飛虎】を撫でながら、ニアヴが鷹揚に答える。

……あれは、実際に触れるものだったのか。実は危なかったのかもしれない。

単なる立体映像と認識してしまった時点で、まだ既成概念から抜け出せてはいないようだ。

この地でのリスクマネジメントレベルをもう少し引き上げた方が  
良さそうである。

ニアヴがその腕を前方に延ばす。精神を集中していると思われる、  
数瞬の間。そして、

「 発火せよ【コール・フォックスファイア/狐火】 」

それはまさに力持つ異界の言葉だった。

【フォックスファイア/狐火】

その発声の後、その掌の上で光が弾けると同時に、巨大な黄金の炎が燃え上がった。

炎は、キラキラと高く吹き上がるが、まるで熱を感じない。

「わ、きれい」

「ふふん、人族の使う炎とはひと味違うであろう。【狐火】は意志持つ炎。自然の木々を傷つけることなく、悪しきもののみを焼き尽くす我が族の秘術であるからな」

「は、はいっ。こんなのきれいな炎、見たことはありません」

「ふふふん、そうじゃろう、そうじゃろう！　ワーズワード、お主はどつじゃ？」

自慢気に、というよりも、褒めて欲しいオーラを発散させてこちらを覗き込んでくる狐。

だが、その期待はスルーする。検証が先だ。

「どうか？　【狐火】」

見よう見まねで、握っていた掌を開く。

俺の掌中で光が弾けると共に、そこには狐の産み出したものと同様の黄金の炎が渦を巻いて燃え上がった。

「わ、やっぱりきれいですね」

「……………はああ!??」

二つの炎を忙しく目で追うシャル。

あんどりと口をあけて、炎をみつめるニアウ。

なるほど、やはり、そうか。

俺の仮定は正しかったわけだ。

「ばかなっ、なぜ我が族の秘術を使える!」

「見せてもらったからな」

「……………技を盗んだというのかや」

「いや、それは少し違う。俺が見せてもらったのは、魔法とやらの発動方法そのものについてだ。初めてにしては上出来だろう」

「は、初めてじゃと!? ありえん……………魔法とは、強大なる力。我ら狐族であれば一族秘伝、お主ら人の子たちとても、国や組織に管理されておるはずであろう! 見たから使えるなどというものではないわっ!」

その勢いに押されるように、シャルが素早い動きでうなずく。

説明責任はないのだが、要望通り魔法を見せてくれたのだから、こちらもある程度の情報開示は必要だと判断する。

逆に言えば、ここで秘匿するメリットもないという判断だ。

「それを説明するのはやぶさかではないが、まず前提として、さつき二人に聞いた『光の粒』について話しておこう。二人には見えていないというが、この林の……………大気の中には色とりどりの光の粒が漂っている」

「光の粒じゃと…………?」

とまどう様にキョロキョロとあたりを見回す狐。まあ見えないの  
だろう。

「そして、この光の粒は生き物にまわりついてくる性質があるらしい。それはシャル、そしてお前の二人とも同様だ。木の上に居るお前に気付いたのもそれだ。なにせ光っているからな」

「はあ!？」

それで、気付かない方がおかしいというものだ。

「この光の粒がなんなのか、始めは俺にもわからなかったが、先ほど見せてもらった『魔法』　それで確証を得られた。これは『魔法』の発動に係している」

それが俺の出した第一の仮定だ。

「……聞かせてもらおう」

身を乗り出すように、食い入ってくる狐。シャルの耳も、その一言一句を聞き逃すまいとピンと立っている。

この目は俺にも覚えがある。新しい知識への期待、知らないことを知る欲求、それは世界が変わろうと、普遍的なものであるらしい。

「その虎は、10つの光の粒が骨格となっている。最も大きい額のそれは黄色。顎にあたる部分が赤。残りの支点が白い粒だ」

俺はそれを一点ずつ指で指し示す。

二人は、頭に疑問符を浮かべながらも、それを目で追う。

もちろん見えてはいないのだろうが。

「次に、実際に見せてもらったこの黄金の炎。火種部分に『それが4つ使われている。基底に赤、赤、赤。頂点が黄色の三角錐の形につながっている形だ。お前の手のひらの上で三角錐の形をなした光の粒が、魔法発動の言葉により、発光し、炎に変化、つまり魔法と呼ばれる現象を引き起こした。それが俺の観察した内容だ。つまり魔法とは、この光の粒の組合せとその発動の二点がトリガーとなり発動するものであるのだろう」

「ここまでは、単純な理論と観察の積み重ねである。

二人の反応を待つことなく、先を続ける。

「そしてこの光の粒、ただ手を伸ばすだけでは触ることはできないが、邪魔だと思えば、払うことはできた。そこから何かしらの意志を持てば、コントロールできる存在であることが判然。光の粒を見えないお前や他の魔法使いとやらは、見えないなりの修練や経験則でコントロールしているのだろうが、その動きが見える俺は明確な『光の粒の操作』でその三角錐の形を作り出すことができたというわけだ。結果は見ての通り」

更に言えばその発動におそらく『発声』は必要ない。『発声』の裏にある魔法発動を『念じる』部分のみが必要なのだと思われる。これもあとで検証を行うことにする。

愕然とするニアヴ。

「魔法が光の粒！？ あ、ありえん……」

「よくわかりませんが、すごいですっ！ やっぱりワーズワードさんは魔法使いだったんですねっ」

「違うと言いたいところだが……一回とはいえ、実際使えたわけだ

から、否定はしないでおう」

『ウィザード』という異名もまた、ハッカーとして拒否すべきものではないしな。

「じゃが……いや、それでは説明が……」

ぶつぶつと、何事が呟いている狐はとりあえず放置でよいとして、この【狐火】である。

折角出たのだから、その威力は知っておきたい。

一本の木を照準し、炎の中できぐる回る三角錐にターゲットを燃烧するよう『念じる』。

三角錐がそれに反応、炎が大きくふくれあがったかと思うと、ターゲットに向かい、一直線に飛行した。

ふむ、我が事なら、すごいものだ。

劫ッ、とまるでナパーム弾の様に、炎が粘性をもって木に巻き付き、その芯から焼き尽くす。

そういえば、巨大な本物の炎、こういったものを見るのも初めてだ。ネットで火山雷や流れる溶岩の動画を見たことはあっても、やはり目の前に見る本物の炎の圧倒的な感動は別ものだ。

「おお、よく燃える」

「ハッ！ くおおお、お主、目を離れた隙に何をやっとなるんじゃ！

他の木々に燃え広がったらどうする！」

「そうだな。すまん」

「すまんではすまんわー！ 降下せよ」

狐が慌てて、別の魔法の準備を始める。

俺は、そこに集まる光の粒の動きを冷静に窺う。

見るべきは光の粒の動き　ニアヴにまとわりつく光の粒の中から、青×3、白×3の光の粒が集められ、六角形が形作られていく様が観測される。

「【コール・ウォーター・フォウル・レイン／降鵜雨】！」

発声と同時に、光の粒は六角形を拡大させつつ、燃えさかる木の頂上に広がり、そこに極地豪雨を降らせた。

火勢は途端に弱まり、一面を水たまりに変えて、やがて木の燃焼は完全に消し止められた。

【降鵜雨】　単純明快に大量の水を産み出す魔法と認識する。質量保存の法則に当てはめられないこの現象はまさに魔法だった。

……これで火と水には困らなくなったな。

狐が不承不承という様子でこちらを向き直る。

「……信じざるを得ぬか」

「無理に信じる必要はないぞ？　どうせ見えないのだから」

「そういう問題ではないわ、阿呆めっ！　お主が今言ったことは、神の不在証明と同じじゃ！」

「神？」

「え、えつとですね。私は魔法のことは詳しくありませんが、例えば火の魔法は戦女神・熙カケナ？　碎様に授けていただくという話を聞いたことがあります」

「我らの神は人のそれとは違うが、どちらも同じ神が名前と姿を変えたものだと言われている」

魔法のある世界にも神はいるらしい。

人間とはよくよく偶像崇拜が好きな生き物だ。

「だが、事実だ」

「それが危険じゃというておる！……お主、下手をすると『世界の敵』になるぞ！」

「……………」

「そうじゃ、よく考えることじゃ」

俺の沈黙を、都合良く受け取ったらしい狐がうむうむと大きく頷く。

「光の粒とやらの話。それは危険じゃ。異質な考えを持つ者は必ず排斥につながる。お主が何者かは知らぬが、その力、他の者には隠すべきであろう」

「あ、それでしたら、逆に服装を魔法使いらしくしたらどうですか。それなら魔法を使っても特におかしく思いませんし」

「おお、その方がイザという時にボロが出ぬかもしれぬな、こういうのはどうであろうか」

どこに意気投合する要素があつたのかわからないが、嬉々と対策を上げていくシャルとニアヴ。

輪の外で展開される会話。だがそれらは全くの無価値である。

「盛り上がっている所悪いが、俺は俺のできる全てのことを自重するつもりはない。神の不在証明？ そう思いたい者は思えばいい。」

俺は魔法と神とは、無関係に存在することを証明しただけだ。魔法以外のもので神の存在を証明すればよいだろう。もし俺が再び『世界の敵』となるとしても、それは俺が世界の敵になるのではない。世界が『俺の敵』になるということだろう」

「ふたたび？」

「いや、そうは言うがな。妾はただ、お主のことを心配してじゃない」

……同じだ。地球もここも。

「違うな。お前が心配しているのは俺ではなく、自らの安寧だ。俺が自由に振る舞うことにより、自分の生活に生じるデメリットを計算しての結果だ」

「なっ、そんなわけなからう！」

俺は、怒りをも発するその獣の光彩を正面から見据える。

「……ならば、なぜ真実を隠そうとする？ なぜ己のできることを抑制する？ 自らの可能性を塗り潰し、群れに紛れ、誰でもない名無しのワーズワードとして生きる提言は本当に俺のためか？」

「そ、そう言うわけではない。お主のいう魔法の原理とやらは、この世界に大いなる混乱を産み出すと言っておるのじゃ。それを望むというのかや」

「それもまた違う。お前の言う『混乱』、それは『改革』というべきだ。この世の成り立ちたる自然原理が一つ明らかになり、それにより古い常識が一つ失われるだけだ。それを拒むお前の発想は変化

を嫌った保守という名の『今』の引き延ばしに過ぎない」

ぐっ、と言葉を飲む込む狐。俺の指摘を理解するだけの知性はあるらしい。

シャルにも何かしら琴線に触れる部分があったらしい。今までにない真剣な瞳で話を飲み込んでいる。

音の消えたかのような濃密な沈黙。

十分に沈黙が浸透したことを確認した後、俺は言葉を続けた。

「……だから。もし俺の為だと言うのなら、俺の行動を制限する方向ではなく、俺の行動をサポートする方向で力を貸して欲しい。シャル、君に逢わなければ、言葉もわからず。ニアヴ、お前に逢わなければ、魔法とはなにかも知ることのできなかった身だ。何も知らない俺には君たちの助けが必要だ」

言葉の通り、俺は自分にできることを自重しない。

今の俺にできることは、二人に助力を請うことだった。

## W a r p W o r l d 1 0 (後書き)

一話5分だと話数だけ無駄に増えそうなので、一話の分量を変更しました。

まだまだ、俺が一人で行動するには情報が足りていないのが現状だ。

俺はまごうことなき流浪者であり、今一人で行動するリスクは、死に直結するものだ。

「もちろんですっ！ ……私は魔法のこととか、神さまのことはよくわかりません。ですけど、さっきのワーズワードさんのお話は、あの……その通りだと思いました！ できることがあるのに……それを諦めて、自分を押さえつけるなんて、確かにおかしいと思います！」

「……ありがとう、シャル」

心強いうなずき。 ……彼女にもなにか抑圧された経験があるのだろうか。

未だ難しい顔をしたままのもう一人に向き直る。

「俺たちをこのまま通してくれるだけでも良い。行く先はユーリカ・ソイル。このまま別れば、迷惑をかけることもないだろう」

「……うむっ」

是と否とも取れない唸るような返事。

先ほど俺が語った『魔法の原理』、俺だけが見えるという『光の粒』。それは、どうやら非常識なものであるらしい。その上、魔法というものをまるで無自覚に発動させる俺という存在を、同じ魔法の使い手であるニアヴは、そうそう無視できないのだろう。

今のニアヴの感情を一言で言えば迷い。  
責任と不安。危惧と興味。風さえ吹けば、どちらにも倒れる弥次  
郎兵衛である。

つまりそれは 全ての決定権が俺にあることと同義なのだ。

一步。二歩。腕を組み、思考に深みに嵌り込んでいるニアヴは、  
俺の接近に気付かない。

三歩。その形の良い顎に右手をすつと伸ばし、グイと少し強引に  
上を向かせる。

「ふあ！？ な、なんじゃっ、いきなりっ？」

その大きく見開いた目が左右に泳ぐ、顔を背けようとするが、俺  
はそれを逃さない。

逆にぐつと引きつけ、瞳と瞳を固定する。

その近さに狐の頬がさつと朱を帯びる。

「迷うくらいならば ニアヴ、お前は俺についてこい」  
「にゃあ！？」

それは純粹に驚きの声なのだろう。

尻尾がぶわつと太く逆立つ。

後ろで少女の「きゃー」という黄色い声が聞こえるが、完全に無  
視する。

「な、なにを言って」  
「人と人の出会いには必ず意味がある。出逢うべくして出逢った。  
それが今だ」

有無を言わせぬ断言。

正確には、ただの出逢いに意味などない。意味を付けることができるだけだ。

このセリフのように。

「お前には強い力があり、高い知性があり、誇る美しさがある。だがそれは、観測する者がいて初めて認識されるものだ」

「わ、妾が美しいっ？ ま、まことかっ？」

……反応するところが想定と違ったが、とりあえず肯定しておく。

「森の生活は退屈だったのだろうか？ それはお前を観測する者がいなかったからだ。お前にはお前を観測する誰かが必要であり、俺もまた同じだ」

「な、ななな」

「だから、俺についてこい。それがお前の運命だ」

ちなみに、『運命』という言葉を口にする人間は、アクターか詐欺師のどちらかである。

そのキーワードを出たら、その相手は軽々しく信用しない方がいい。

「……妾は濇獣<sup>ルヴァ</sup>じゃぞ？」

「関係ない」

「お主のことを危険だと断すれば、寝首を掻くかも知れぬ」

「本望だ」

全ての言葉を肯定する。

この場で即座に死ねと言われたとしても、俺はそれを肯定しただろう。つまり、これは俺にとってそういう意味しかない会話だ。

だがニアヴにとっての意味は別。

一言ごとに、朱色の支配面積が増えていく。

「妾を敬うことも畏れることしない者など初めてじゃ……」

「それが俺だ」

「……ワーズワード。お主、本当に何者なのじゃ？」

「それこそ自分の目で確かめればいい。俺についてくれば、きっと、おもしろいぞ」

「きゅ、きゅっ……」

手の力を抜き、その身体を解放する。

一瞬名残惜しそうな表情を見せたニアヴだが、次の瞬間には驚異的な跳躍力で身を離れた。

「…ふ、ふん！ やはりお主は危険な男じゃ！」

「否定はしない」

背を向け、腕を組み、フンと鼻を鳴らしす仕草は、昔何かのコンテツツで見たことがあるようなないような。

「ふふふ、じゃが！」

振り返ったニアヴが吹っ切れた笑顔を見せる。

「じゃが、妾は面白いものが大好きじゃ！ ワーズワード、お主は面白い。非情に面白いぞ！ よかろう、お主について行ってやろうではないか！」

「そうか。助かる」

扱いやすくて、本当に助かる。

質の良い情報を得るためには、質の良い情報源が必要だ。

シャルの知識が世間一般レベルであるのなら、魔法というものは、一般人が扱うことのできない特殊技術だということになる。

となれば、次に同じく魔法の知識を持つ者に出会える可能性は、かなり低めに設定せざるを得ない。

この身にまとわりついてくる光の粒、これが魔法の源であることは理解したが、それを独自に調査研究していくには、どれだけの時間が必要となるか判然らない。

ニアヴの協力は、俺にとっては不可欠なものであった。

そのために最も有効であると思われる手を、手段を選ばず使わせてもらった。

手垢が付きまくった泥臭い芝居は、ロールプレイ我ながら鳥肌ものだったが、結果が出せたので良しとする。

運命の出逢いを演出する過程で、狐になにか別のことを勘違いさせたかもしれないが、誤解を解くのはのちのちでよからう。

話がまとまったのなら、これ以上のタイムロスは不要である。

「さて、聞きたいことはこの地の木の数ほどあるが」

「あ、あははは」

「勘弁してくりゃれ」

「まずは目的の街へと向かおう」

「はいっ」

「ふむ。ユーリカ・ソイルか……考えてみれば人族の街に下りるのも久しぶりじゃな」

「街は嫌いか？」

「くつくくつ、とんでもない、大好物じゃ！　どんな面白いことが待っておるのかのう」

「……それは重畳」

ニアヴは、巨大な青い虎に飛び乗ると、手招きをした。

「さあ、乗るがよい。【リープ・タイガー／飛虎】の足ならば、あつと言つ間じゃ」

「乗つていいんですか?」

それを肯定するように、飛虎はくるると小さく唸ると、シャルが乗りやすいよう、腰を下ろした。

先ほどの虎の言葉はニアヴが遠隔で喋っていただけなのだろう。たとえ言葉が喋れないとしても、この虎に生物としての思考があるというのなら、それを一瞬で創り出す魔法とはすごいものだ。

完全なAIは科学の極みにある地球ですら、未だ存在していないというのに。

「あ、ありがとうございます、飛虎ちゃん」

「くるるー!」

「あひま 鎧も鞍くらもないだと……振り落とされないだろうな……」

「くふ、心配であれば、妾の腰にしがみついてもおつても良いのじゃぞ?」

「それは遠慮する」

「即答!??」

「さ、シャルは俺の前に。後ろから支えよう」

「はい、えへへ……」

「くつ、もうよいわ! 行け、飛虎よ!」

「くるるるー!」

まだベストの体勢が決まっていないのに、疾走を開始する飛虎。

「ちょま、お、おおおおおー!」

三人と一匹は、情けない悲鳴を尾と引く、一迅の風が変わった。  
次なる舞台には一体何が待ちかまえるのか。

そして、ワーズワードの冒険は続く。

W a r p   W o r l d   1 1 ( 後 書 き )

区切りがいのどじりどじりおわじっ

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3817y/>

---

ななしのワーズワード

2011年11月20日02時11分発行